

マールブルクにおける宗教研究

大塚 秀 見

はじめに

ドイツ連邦共和国のほぼ中央に位置するマールブルク (Marburg) は、人口七万余りの大学町である。マールブルクは小さな町ではあるが、宗教学研究の分野においては、特別な意味をもっている。それは、宗教学研究において、比較的長い歴史をもち、かつ現在もなお、研究者の注目を浴びているからである。

近年、多くの学問研究が、大都市を中心に流れていることは、宗教学として例外ではない。情報量の多い大都市は、資金力でも、地方都市を圧倒している。ヨーロッパからアメリカへと、シフトも定着しつつある。

しかし、小さな地方都市マールブルクは、そうした流れの中では特異な存在であり続けている。その理由としては、宗教学の歴史がまだ一三〇年ほどという点と、神学研究などに比べ研究者の絶対数が少ないことが原因として考えられる。さらに強調されるべき点は、宗教学という学問がかなり研究者個人個人の影響力が強いという面である。有名な研究者が続いて二人もであれば、その大学は世界的に注目を浴びることになる。⁽¹⁾ その点でも、マールブルク

は条件を満たしている。

本稿では、マールブルクにおける「宗教研究の視座」を、その歴史的展開を、今後の展望を含めて再確認することを試みる。

一、マールブルクの宗教学研究の淵源

一五一七年にマルチン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) によってなされた、九十五ヶ条の提題は、ローマ・カトリック教会に大きな衝撃を与えた。罪のゆるしは、神の意志にのみ基づくという立場からの、ルターによるこの提題は、多くの聖職者の賛同を得ることとなったからである。贖宥状(免罪符) 販売等に見られる教会の腐敗は、教会の内側からの改革を必然的に準備していたといえよう。

また一方で、ローマ・カトリックの権力構造は、ルターの改革をきっかけとして、ドイツの封建領主たちの反発を顕在化させることになった。すなわち、外的要因も高まっていたということができる。

ルターの擁護者の一人となったのは、マールブルクに方伯城をもつフィリップス公であった。ローマ・カトリック教会の世俗的な権力を快く思わない諸公たちの援助もあり、その後の北ドイツはルター派を中心としたプロテスタントが浸透することとなった。⁽²⁾

一五二七年に、フィリップス公によってマールブルク大学(正式名称は、フィリップス大学 Philipps Universität)は開学された。ヨーロッパの大学の通例にもれず、最初は神学部だけの単科大学であった。この神学部は、プロテスタント系としては最も古いことになる。それもそのはずで、フィリップス公の建学の意図は、ルターの宗教改革の理論的な後押しであったからである。

一五二九年には、歴史的に有名な、ツヴィングリ (Huldrych Zwingli, 1484-1531) とルターとの会談が、マルブルクの方伯城で行われた。この会談は、両者の間で最後の〈聖餐問題〉について意見調整がつかず、結局合意に達することはできなかった。⁽³⁾

ルターの宗教改革の援護として建てられたマルブルク大学においては、常に批判対象としてのカトリック神学が眼前にあった。キリスト教は、その発生の初期は別にして、四世紀にローマ帝国で国教となってからは、一神教の性格そのままに、他の宗教を認めようとせず、他の宗教はすべて劣ったものであるという観点に立っていた。しかし、プロテスタントにとっては、カトリックを頭から否定することはできなかったし、理論上も不可能である。そこに、はじめて「比較」という視点が、一神教であるキリスト教の中に登場したのである。

それ故、一般的にみて、プロテスタント系の大学の方が、近代以降の宗教学研究は盛んであるように思われる。

二、ルドルフ・オットーの登場

マルブルクが、宗教学研究者にとって大きな意味をもっているのは、ルドルフ・オットー (Rudolf Otto, 1869-1937) の存在を抜きにしては理解できないであろう。

オットーは、一九一七年に発表した『聖なるもの』(Das Heilige) によって、一躍世界的な注目を浴びた。そして、『聖なるもの』は、現在でも宗教学の不滅の名著となっている。⁽⁴⁾「戦慄すべきもの」として、「神的なもの」を捉えた彼の造語「ヌミノーズ」は、宗教学界では定着した概念ではないが、浸透した重要な用語となっている。

それに見逃してはならない点は彼が組織神学の教授というポストにあったということである。このことは、神学研究者との軋轢に苦しむヨーロッパの一般的な宗教学のイメージとは大きく異なる点である。マルブルクでは、少な

くとも表面的には、宗教学は神学部からの攻撃を受けにくい経緯がある。オットーの存在によって、マールブルクの置かれている立場は、他の欧米の大学等の研究機関と、基盤的に大きく異なっているといえることができるであろう。

三、オットーの功績

オットーの果たしたマールブルク宗教学への貢献は、多方面に渡っている。特筆すべきは、人材の登用と研究施設の拡充であろう。

人材の登用という面からは、ハインリッヒ・フリック (Heinrich Frick, 1893-1952) とフリードリッヒ・ハイラー (Friedrich Heiler, 1892-1967) の抜擢が指摘できよう。

フリックは、いまだ日本では高い評価を受けているとは言いがたいが、その研究視点は、独創的な面があり、今後再評価される可能性が高い⁽⁵⁾。宗教学研究と神学研究の両面を平行して行った、オットーの後継者であった。

もう一人の偉大な後継者ハイラーの登用は、大きな事件であったことは想像に難しくない。ハイラーは、一九一八年に大著『祈り』 (Das Gebet) を出版し、スウェーデンの牧師であり、宗教学者として名高かったナータン・ゼーデルブロム (Nathan Söderblom, 1866-1931) に見込まれていた。とはいえ、ハイラーを登用することは、大きな決断であったはずである。

なぜならハイラーは、ミュンヘン生まれのカトリック教徒だったからである。現在でも、マールブルク大学は、神学部⁽⁶⁾といえはプロテスタントの神学部を意味する。正式には、エバンゲリッシュェ神学 (Evangelische Theologie) という名称である。その神学部⁽⁶⁾に、カトリック教徒の教授を招くということは、画期的なことであったという以上に、無謀なことであったに違いない。

そのことを証明するかのようになり、オットーの死後、ハイラーは、順風満帆の研究環境ではなかったようである。この点に関しては、ナチの台頭による戦争という嵐がおこったので、一概には判断がつきにくい時代ではあるが、最終的にミュンヘンで晩年を送ったことと考え合わせると、問題があったと考えたほうが理解しやすいようだ。

四、宗教学資料館の創設

オットーに関して、さらに強調しなければならない点は、〈宗教学資料館〉(Religionskundliche Sammlung)の創設である。オットーが、後半生のかかりの時間を費やして精力を傾けた仕事だが、この宗教学資料館の建設なのである。マールブルク大学の創立四百年記念事業として、ようやくして日の目をみた宗教学資料館は、オットーの類まれなる政治的才能なくしては、存在できなかったであろう。

宗教学資料館は、大学関係者ばかりでなく、広く一般の人々が「宗教」を理解しやすいように計画されたものである。文献ではわかりにくい、世界中で行われているさまざまな宗教現象を理解しやすいように、宗教儀礼で実際に使われている祭具などを展示するのが主な目的であった。そのため、博物館が目指すような貴重品、骨董的価値などは重要ではなく、模造品でもいいという発想があった。そして、手に触れてみたりすることが可能であるような施設が目指されたのであった。⁽⁷⁾

宗教学資料館設立にいたる事情に関しては、前田毅氏の論文「オットーにおける宗教の理論と現実―マールブルク宗教学資料館〈博物誌(一)〉」「オットーの遺産―マールブルク宗教学資料館〈博物誌(二)〉」「オットー宗教学の原風景―へ旅するオットー(一)」が詳細に論じている。前二者は、宗教学資料館建設に向けての努力の過程が緻密検証されており、後者はオットーが宗教学資料館構想を抱いた背景および動機について検討が加えられている。⁽⁸⁾

五、ハイラーと、その後のマールブルクの宗教学

オットーの宗教学研究の伝統を引き継いで、さらに学的に確立したのは、前述のハイラーであった。ハイラーは多数の著作を残しており、その宗教学は、一つの時代を画していると言えよう。

ハイラーの著作で、現在でもよく読まれているのは、『宗教の現象形式と本質』(Erscheinungsformen und Wesen der Religion 1961)であろう。六〇〇頁に及ぶ大著であるが、宗教学の学生はかなり読んでいるという印象を受けただ。そのほかに、ハイラーが弟子たちと一緒に著した『人類の諸宗教』(Die Religionen der Menschheit, 1959)がある。この本は、すでに五版と版を重ねている。そして、教科書的な意図によって編集されているので、一般の読者にも受け入れられて幅広く読まれているようだ。⁽⁹⁾

ハイラーの後、ドイツの宗教学を代表したのは、マールブルクでオットーについて学んだグスタフ・メンシング(Gustav Mensching, 1901-1978)であった。メンシングはボン大学に就職したが、そこでは、宗教学の独自性や、神学からの独立を主張するのに大きな努力を費やさなければならなかった。⁽¹⁰⁾それに比べると、マールブルクの環境は、宗教学にとっては、オットー以降は、非常に恵まれたものであったといえることができるであろう。

現在のマールブルク大学での、宗教学研究のための機関は、神学部に属する宗教史学科と、非ヨーロッパ言語と文化学部に属する宗教学学科がある。そのほかに、学生の登録はないが、大学附属の機関として、オットー創設の「宗教学資料館」がある。

研究者としては、ハイラーの直系として、正統的な宗教現象学を継承しているのが、ハンス・ユルゲン・グレシャート(Hans-Jürgen Greschat)と宗教学資料館館長のマルチン・クラッツ(Martin Kraatz)である。グレ

シャートは、西アフリカの宗教と仏教に関する著作が多い。⁽¹¹⁾ クラーツには、「宗教の対象物」に関する卓抜した研究視点が見受けられる。

それに対して、方法論的に、オットーやハイラーを批判するのが、クルト・ルードルフ (Kurt Rudolph) とライナー・フラッシュェ (Rainer Flasche) である。両者の主張は、一九六〇年九月にマルブルクで行われた第十回世界宗教史会議で議論された方向性の延長にあると言えよう。⁽¹²⁾ そこでは主に、宗教現象学の方法論の欠点が指摘されたわけである。しかし、この欠陥は宗教研究が宿命的にもつ欠陥である。その証拠に、宗教現象学の理論を乗り越えた理論は登場していない。

現在のように、方法論や理論研究が下火の傾向にあることを考えると、ルードルフやフラッシュェの問題意識もマルブルクの伝統を引き継いでいるということができるとはなからうか。

注

(1) 例えば、シカゴ大学は、ヨアヒム・ワッハ (Joachim Wach, 1898-1955) とミルチア・エリアーデ (Mircea Eliade, 1907-1986) によって、世界中からの注目を浴びることになり、彼らの死後も中心的役割が期待されているといえよう。

(2) カトリックに対して、プロテスタント系諸派が浸透した原因については、教義上の違い以上に、政治的、権力的な力関係が作用している面も否定できない。

また、エリアーデが、「ルター主義は、へその発端から印

刷された書物の子であった」。印刷物という手段に助けられてこそ、ルターは強力かつ正確に、その使信をヨーロッパのすみずみにまで送り届けることができたのである。」と指摘している面も無視することはできない。

ミルチア・エリアーデ『世界宗教史』第三卷 鶴岡賀雄訳 筑摩書房一九九一年 二七九頁(原書の出版は、一九八三年)

(3) 聖餐における、パンとぶどう酒を、ツヴィングリは神の象徴として理解しようとしたのに対して、ルターは神そのものである解釈した。この点で、両者は、歩み寄ることが

できなかった。

- (4) 『聖なるもの』は、現在もドイツの書店でよく見かける。ペーパーバックになっており、宗教学の本としては非常に手に入れやすい本である。また、たくさんの言語に翻訳されていることから、その影響の大きさを知ることができる。

- (5) フリックに関しては、ドイツ国内でも十分に評価されているとは言えない。一九九三年に生誕百年の講演会が、マールブルクの宗教学資料館で行われた。その時の館長のマルチン・クラッツの記念講演録が出版されることで再評価される可能性がある。

- (6) プロテスタントという言葉は、その前提として伝統的なカトリックを想定することになる。それを嫌い、全く別の教義体系と捉えようとするところから、エバンゲリシエ神学という名称を使用するのだと推測される。

- (7) 宗教学資料館の館長は、初代がオットーで、二代目がフリック、そして、事務的な館長が数名あいたにはいるが、三代目がハイラーで、現在の四代目がクラッツ博士である。現在の資料館は、予約をすると、館長自らが案内して回ってくれる。この案内し説明することによって、宗教の理解を深めてもらおうという姿勢は、実は二代目のフリック以来の伝統となっていることが、フリックの生誕百年記念講演で、クラッツ博士が明らかにされた。

- (8) 前田毅「オットーにおける宗教の理論と現実―ヘマール

ブルク宗教学資料館」博物誌(二)「鹿兒島大学文科報告」二六号 一九九〇年

同 「オットーの遺産―ヘマールブルク宗教学資料館」博物誌(二)「鹿兒島大学文科報告」二八号

一九九二年

同 「オットー宗教学の原風景―へ旅するオットー」

(一)「鹿兒島大学文科報告」三〇号 一九九四年

- (9) もともとは、岩波文庫のモデルとなったレクラム文庫に三分冊で取められていた。現在では、A五版の六七〇頁ほどの一冊となって、出回っている。

- (10) メンシングには多数の著作があるが、ドイツの本屋で新本で手に入るのは次の3点である。

Die Welt-Religionen 6. unveränderte Auflage VMA-Verlag Wiesbaden

この本は、廉価本として、書店にかなり出回っている。ただし、発行年の記載がないなど、急いだ作りのように感じられる。著作権がされたのを機会に出回ったリプリント版なのであろう。

Soziologie der Religion 2. neubearbeitete und erweiterte Auflage 1968 Ludwig Rohrscheid Verlag Bonn (初版は、一九四七年)

Leben und Legende der Religionsstifter Hers. Peter

Parusel Patloch Verlag 1990

日本語で読むことなるもののほがみの三点である。

『宗教とは何か—現象形式・構造類型・生の法則』下宮守之・田中元訳 法政大学出版局 一九八三年

(Die Religion-Erscheinungsformen, Strukturtypen und Lebensgesetze 1959)

『宗教をさぐる寛容と真理』田中元訳 一九六五年 理想社

(Toleranz und Wahrheit in der Religion 1955)

『宗教学史』下宮守之訳 創造社 一九七〇年

(Geschichte der Religionswissenschaft 1948)

(11) ただし、『宗教学史』は、残念ながら絶版となった。編著や共著も多く、また序文等も数多く執筆している。

で、現在手に入れることが可能な関係書籍は50以上にない。このことは、その中から主要なものを挙げておく。

Kitawala-Ursprung, Ausbreitung und Religion der Watch-Tower-Bewegung in Zentralafrika 1967 N. G. Elwert

Die Religion der Buddhisten 1980 UTB-1048

Was ist Religionswissenschaft? 1988 Kohlhammer

特に、後者の二点は、新書版として出版されており、幅広く読まれている。以下にその概要を述べる。

(12) X.Internationaler Kongress für Religionsgeschichte

11.-17. September 1960 in Maeburg / Lahn Hrsg.

Organisationsausschuss 1961 N. G. Elwert